



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大江健三郎『万延元年のフットボール』：発話・共同体・歴史
Author(s)	吉岡, 亮
Citation	国語国文研究, 111, 29-46
Issue Date	1999-03-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94699
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_111_29-46.pdf



大江健三郎『万延元年のフットボール』

—— 発話・共同体・歴史 ——

吉 岡 亮

序

大江健三郎はその小説の舞台として外部の状況から隔てられた閉鎖的な共同体(「谷間の村」)を繰り返し取り上げている。初期の『飼育』『芽むしり仔撃ち』、中期の『万延元年のフットボール』や『同時代ゲーム』『M/Tと森のフシギの物語』、そして最近の『燃えあがる緑の木』三部作と、代表作と言われる作品の多くが「谷間の村」を舞台としている点で共通している。その中で、一九六七年に発表された『万延元年のフットボール』は、「谷間の村」の描き方という点で一つの転換点をなすものだと考えられる。と言うのも、〈歴史〉の語り方を実験する場として「谷間の村」を作り出していくことが自覚的に行なわれた最初の作品となっているからである。

ただ、「谷間の村」が舞台となっている作品の先行研究では、「大江健三郎」が「自己をアイデンティファイする空間」⁽¹⁾として「谷間

の村」を用いているという程度の言及にとどまり、「谷間の村」がそれぞれ作品の中で具体的にどのような方法に基づいて作り出されているのか、また、作品の通時的な変遷の中でその方法がどのように変化しているのか、といった点についての分析は不十分なままという状態にある。本論はそうした状態を踏まえて、転換点に位置する『万延元年のフットボール』を取り上げ、テクスト内の表現に即して、「谷間の村」がどのように作り出されているのか、そして、そこからうかがえる大江健三郎の問題意識はいかなるものなのかを明らかにすることを目標にしている。本節の以下の部分では、『万延元年のフットボール』に関する先行研究への言及を通して、その目標に到達するための分析方法を明確化する。

『万延元年のフットボール』の先行研究で一番多く見られるのは、「蜜三郎」と「鷹四」の言葉や認識を彼らのアイデンティティのあり方や「性格」「内面性」といった面から議論し、両者がある種のタイプへと還元していくような分析である。こうした分析の問題点の一

つは、物語の構造と彼らの人物像や言葉が切り離されて議論されてしまう点にある。こうした欠点を回避するためには、彼らを実体化するのではなく、物語構造との関連における機能という側面から彼らの言説を捉えていく必要があるだろう。そこで、本論では、物語の構造として現在時で起こる出来事（「スーパー・マーケットの襲撃」）と過去の二つの出来事（「万延元年の一揆」「朝鮮人部落襲撃」）との関係に着目し、それが個々の登場人物の「発話」においてどのように語られているのか、また、「発話」同士がどのような「解釈の葛藤」を引き起こしているのかを見ていくという分析方法をとる。そうした「発話」における「解釈の葛藤」の考察を通して、「蜜三郎」と「鷹四」の言説の性質と機能を明確化し、「万延元年のフットボール」における「谷間の村」の作られ方とそこからうかがえる大江健三郎の問題意識を捉えるという、本論の目標地点に到達したいと考えている。

I

本節では、「万延元年の一揆」に関する登場人物の見解の検討を通して、「万延元年のフットボール」の「発話」における「解釈の葛藤」のあり方を整理してみたい。

「万延元年の一揆」に関する「芝居」の「台本」を書いた「郷土史家」は「蜜三郎」への手紙で「一揆」に関する以下のような見解を提示している。

僕（蜜三郎・引用者注）と手紙を交換した旧教員の郷土史家は（中略）科学的な態度の持主で、万延元年前後に、この領内のみならず愛媛全域に様ざまな一揆がありそれらの個々の力と方向を総合するベクトルが維新を指していたことを重く見ていた。かれが当藩の唯一の特殊事情とみなすのは、万延元年を起点にする十数年前、藩主が寺社奉行役をつとめて国元の経営に歪みをきたし、それ以来領分町在の者に万人講と名づけて日銭を賦課し、百姓には先納御預け米、次いで「追先納」を課していたことである。

（6）⁵

「郷土史家」は、「一揆」を「愛媛全域」の「様ざまな一揆」の一つとして一般化し、その中での「当藩の唯一の特殊事情」という共同体の「一揆」の原因の個別性を議論しようとしている。それはまた、「維新」という「一揆」後の出来事との関わりから「一揆」の歴史的な意味を明らかにしているものでもある。

こうした見解に沿う形で、「寺の住職」は「一揆」に関して「蜜三郎」に以下のように語っている。

高知からやってきた男が寺に滞在して、当時の住職をなかだちに蜜ちゃんの曾祖父さんとその弟に工作して一揆を起させたんだと、僕の父は解釈していた。（中略）一揆によってこちら側の支配体制が揺さぶられることを有利とする、そうした向う側の勢力から送りこまれた工作者に活動を許す不穏な状況は、当時この谷間のみならず、藩の全地域を覆っていた。住職も、蜜ちゃんの曾祖

父さんも、一揆が起らなければ、谷間の百姓たちが救助されえないと考えることでは一致していたらう。(中略)ところで一揆を起すためには指導者グループがいるが、一揆がどのように成功してもその指導者グループは捕えられて処刑されるにちがいない。やがては犠牲となる運命であるが、一揆の間は谷間のみならず、ここから城下町に到る全域の百姓たちの指導権を握るグループを、どのように選ぶか? そこで蜜ちゃんの曾祖父さんの弟が訓練していた若者組のグループが眼をつけられたわけだ。

(6)

この後、「住職」は「若者組」の指導者であった「曾祖父さんの弟」だけは「一揆のあと高知に抜け出し、そこから大阪か東京に渡るという密約」を得ていたこと、「森の向うから来た男が約束の執行の責任者」であったこと、そして、そうした解釈が「曾祖父さんの弟が森を抜けて出発し、名前を変えて維新政府の高官になった」という共同体で継承されている「風説」に合致するものであることを述べている。

「住職」の「藩の全地域」の「状況」についての見解は、先に引用した「郷土史家」の見解とほぼ一致している。そして、その外部の「状況」を共同体の側に投げ返すことで、自分の祖先である「住職」と「蜜三郎」の「曾祖父」が「一揆が起らなければ、谷間の百姓たちが救助されえない」と考えたはずだという、過去に所属する人物達の「状況」に対する認識を推察している。その上で、「住職」は祖先の「住職」と「蜜三郎」の「曾祖父さん」という共同体内部の有

力者の立場にあった人間を視点化することで、「若者組」が「百姓たちの指導権を握るグループ」として選択された理由を推測している。「郷土史家」の見解は現在から見えてくる「一揆」の歴史の意味を、「住職」の見解は過去の行為者の認識や動機を相互に関連づけながら「一揆」内部の具体的な歴史的状況を明らかにするものとなっている。両者の見解には説明の焦点の当て方に若干の違いがあるが、共同体の内外を分割する仕方は共通している。両者とも、「維新」や「愛媛」「高知」といった外部としての「日本」の時間との関係において共同体の時間空間を捉えており、共同体内部の「状況」が外部の「状況」との関わりにおいて見えてくる説明となっている。

こうした「住職」と「郷土史家」の見解を結びつけることで私たちは「万延元年の一揆」に関する一つの解釈を手に入れることになるわけだが、いまそれを「蜜三郎」の言葉を借りて「科学的な」解釈と仮に命名しておこう。この「科学的な」解釈を念頭に置きながら、次に「鷹四」の「一揆」に関する見解を見てみよう。

「蜜三郎」は、「鷹四」が「万延元年の一揆に若者組が果たした役割を解説してあらためて一揆のイメージをえがきだし、谷間の若者たちにその記憶を継承させようとしている」のを耳にする。その「鷹四」の言葉は以下のようなものである。

若者組の連中はじつに兇暴だったわけだが、ある意味ではその兇暴さが、普通の百姓である参加者たちに、ひとつの確実な安心感をあたえていたんだ。当面の敵を傷つけたり殺したりしなければならぬ時は、自分の手を汚すことなくならず若者組の連中の

兇暴さをあてにできたからね。(中略)ある村をいったん一揆にひきいれると、その村の不良少年どもを選んで、新規の若者組が作られた。(中略)したがって一揆は、この谷間の若者組を参謀本部とすると、村単位に、おのおのの村ひとつひとつの不良少年どものグループによって組織されている下部構造によって構成されていた。この谷間の若者組は、新しい解放村ができるごとに、その村の不良少年どもを呼び出して、どの富裕な家が不正を働いてきたかを密告させてはそこを襲撃した。(中略)そして昨日までは、人間あつかいされなかった極貧の不良少年どもが、権力を握ってその村の新しい指導者グループを構成したわけだ。

(8)

この後、「鷹四」は彼らが指導者グループとして選ばれた理由として、「村の日常生活者たちからはつねづね余計者あつかいにされてきた者たち」だったこと、暴力的なことを行なう「素質と解放感」を持っていたことなどを挙げている。そして、その「若者組」が「一揆」の間に「尊敬の念」を集めるようになり、「谷間のみならず当藩全体の民衆のヒーロー」となっていたことを語っている。

「鷹四」の見解の特徴は、「若者組」を主語とした統辞的構造の言表によって「一揆」を表象している点にある。「人間あつかいされなかった極貧の不良少年ども」から「民衆のヒーロー」へという「若者組」の変貌過程・成長過程を「一揆」の過程と組み合わせ、それに適合するように「一揆」の諸要素を調整して統一的な言表として編成していく。そうした強い修辭的調整を加えた形での見解になっ

ているのである。また、「若者組」が状況や出来事をどのように意味づけていたのかという点よりも、彼らが他の人物達からどのように意味づけられていたのかという点を集中的に描き出すことで、より物語化された劇的な形で「若者組」の行動が浮かび上がってくる構成にもなっている。こうした「若者組」の表象は、先に見た「住職」の見解における「若者組」のあり方と対立するものとなっている。と言うのも、「住職」の見解では共同体の有力者によって選択される対象の位置にあった「若者組」が、「鷹四」の見解では「一揆」の状況に積極的に関わっていく主体として表象されているからである。

また、「鷹四」の見解は、共同体の時空間の捉え方においても「科学的な」解釈とは異なったものとなっている。「鷹四」は、外部としての「日本」の時空間との関わりを切断した上で「村」を「単位」として「一揆」を捉えようとしており、「日本」との関係において「藩」を「単位」として過去の「状況」を描き出している。「郷土史家」や「住職」の見解とは、時空間の捉え方という点においても異質なものとなっているのである。

と同時に、「鷹四」の見解が、「蜜三郎」の指摘するように「谷間の若者たちに……(一揆の・引用者注)記憶を継承させようとしている」ものであることにも注意しなければならない。すなわち、「鷹四」の見解は、右で指摘したような「若者組」を主語とした言表の統辞的構造と「谷間の若者たち」に向けて語るという発話の状況とが密接に結びついたものとなっているのである。そして、こうした「若者組」についての語りは、「鷹四」が「フットボール・チーム」という形で組織化しようとしている「谷間の若者たち」の共同性や

行動に「万延元年の一揆」という歴史的な事象を参照した上での意味を与えるものにもなっている。

こうした「鷹四」の見解の発話を行なう状況との関係に關して、以下に見るような「蜜三郎」による「鷹四」の見解への批判を参照しながら検討してみよう。

右に引用したような「鷹四」の見解を「蜜三郎」は、「一揆の指導者を曾祖父の弟と限定しないで、かれをふくむ谷間の若者組全体として説明」した、「作為」を含むものと受け取っている。それは、例えば、「蜜三郎」の認識においては「万延元年の一揆における若者組の役割は酷たらしい暴力の匂いにみちているのみ」であるのに、「鷹四」の話がそれを聞く「若者たち」に「力強く陽気な笑い声を誘発する」ものになっている点に表われているとされている。その上で、「鷹四」が「城下町までの村々の庄屋や村役人たちは、道端に跪かされて、百姓たちはみな素手でその頭をひとつずつ叩いて通り過ぎた」というのを「愉快なエピソード」として提示していることに對して、「蜜三郎」はその「庄屋たち、村役人たちは、頭蓋骨の中身を崩れた豆腐みたいに死んでしまった」こと、また「民衆の行列が通り過ぎた後に人糞や人尿をかけられた家財の前で、うつぶせに這いつくばって死んでいる老人たち」がいたことなどを反証として挙げている。

「蜜三郎」は、発話内容と発話行為を分離し、発話行為における「目的」(谷間の若者たちに「一揆の記憶を継承させる」に発話の内容を從属させている点を「鷹四」の「作為」として退けようとしている。つまり、「蜜三郎」は「鷹四」の発話の「作為」性を発話行為のレベ

ルの発話内容のレベルへの干渉に起因するものと捉え、その干渉性が過去の出来事の的確な再現を妨げていると考えているのである。

その点から見れば、「蜜三郎」が「郷土史家」の見解を「科学的な」ものとしていたのは、現在における発話の状況(発話行為のレベル)と語られる内容としての過去(発話内容のレベル)とを切り離した議論となっていたからだとわかるだろう。このような「蜜三郎」の立場から「鷹四」の発話の特徴を見ると、発話内容と発話行為を不可分なものとすることで、現在の状況にある効果をもたらす実践となっていることがわかる。

ただ、共同体の時間空間の捉え方と出来事を分節化していくカテゴリーという点では、ここでの「蜜三郎」は「鷹四」と同じ枠組みのもとで語っていると言える。なぜなら、「蜜三郎」は、「鷹四」が提示していた外部としての「日本」との関わりを切断して構成される時間空間と「若者組」「百姓たち」「庄屋たち、村役人たち」といったカテゴリーを前提としているからであり、それらを共有した上での表象の内容と表象に対する価値づけの差異が問題となっているからである。

さて、以上の点を踏まえて、『万延元年のフットボール』の「発話」における「解釈の葛藤」のあり方を「鷹四」の発話を軸としながら整理してみよう。「鷹四」の発話は過去の出来事の表象に関わるレベル(内容のレベル)と現在の状況に関わるレベル(行為のレベル)とが重ね合わされている。その内容のレベルは、「若者組」の表象の問題を軸にして、「住職」の見解や「蜜三郎」の認識と相互に批評しあう関係にある。また、その行為のレベルは、「蜜三郎」による「鷹

四」の発話への批判を間に置いて、「科学的な」解釈と相互にその性質を規定しあうような関係にある。また、時空間の捉え方という点から見るならば、「鷹四」の発話は、外部としての「日本」との関わりを切断した上で共同体の時空間を構成しており、「蜜三郎」の発話もそれを共有するものとなっていたのに対して、「科学的な」解釈においては、外部としての「日本」との関わりにおいて共同体の時空間が捉えられている。こうした、複数の「発話」がそれぞれの内容のレベルと行為のレベルとを相互に批評・規定しあうような相互参照的なあり方と、表象を定位する時空間をどのように構成するかという点が、「解釈の葛藤」を引き起こす要因となっていると考えることができる。

II

前節で見たように「鷹四」の発話は二つのレベルが重ね合わされたものとして捉えることができるわけだが、その現在の状況に関わる行為のレベルが、テキストにおける現在の出来事と過去の出来事に関する表象とを関連づけていく要となっている。その点を見ていくためには、作品に導入されているもう一つの過去である「朝鮮人部落襲撃」に関する「解釈の葛藤」を検討しておく必要がある。以下では、前節で言及した「解釈の葛藤」を形成している要因を踏まえて、「蜜三郎」の発話との相互参照性に着目しながら、「鷹四」の発話が何を語ることで行なっているかという点からその問題を検討していく。

「蜜三郎」は、「谷間の無法者グループ」が中心になって行なわれた二度にわたる「朝鮮人部落襲撃」について、「一回目の襲撃」において「朝鮮人部落」で死者が出たため、「第二回目の襲撃」は「谷間の日本人の側にも、ひとり犠牲者を出して、殺人の埋めあわせ」をする「償いの襲撃」として行なわれたと説明している。そして、その「償いの襲撃」において「殺される役割」を担っていたのが「S兄さん」だったと述べ、次のように語っている。

なぜ朝鮮人部落への襲撃がおこなわれたかといえば、青年たちに襲撃をそそのかし、それをやらざるをえないところまで追いつめたのは、村長をはじめ農業をやっている有力者たちだったんだが、それは朝鮮人の闇屋集団が、村の農家の隠匿している米を摘発して地方都市へ売りに行くようなことをくりかえしたのが、そもそもの発端なんだ。偽の申告をして米を隠匿している農家にとっては、警察力に頼ることはかえって不利だから、朝鮮人たちに拮抗する力をそなえた谷間の無法者のグループに望みを託したわけなんだね。無法者グループのメンバーの大半は農家の子弟だったから、かれらには襲撃に加わる階級的必然性もあつたのさ。しかし、農地開放以前から、うちの農地の経営は破綻していた。隠匿している米などは一粒もない。むしろジンが朝鮮人に渡りをつけてひそかに闇米を買っていたくらいだよ。それでいて、なおかつS兄さんは襲撃に加わり、かれの粗暴な仲間が朝鮮人を殺すと、贖罪しとくざい羊の役割をひきうけたんだ。それは子供の僕にとって理解できることじゃなかった。

「蜜三郎」は、出来事の「発端」を「朝鮮人の闇屋集団」の行動に求め、それに対抗するものとして「有力者」による「無法者グループ」への「そのかし」があり、その結果が「無法者グループ」による「襲撃」であったという形で、出来事内部の事象の前後関係を整理し、行為主体としての集団とその行為を原因―結果の関係から分節化するという方法をとっている。その中において、「S兄さん」は、集団間の行為の因果関係からも、集団の行為の動機からも抜け落ちてしまう存在となっている。そのため、「S兄さん」だけでは、「贖罪羊」の役割をひきうけた人物という集団間および集団内部の因果的構図から外れた、別種の意味づけが行なわれているのである。

また、時空間の捉え方という点から見た場合、ここでの「蜜三郎」の見解は、外部としての「日本」の時空間を捨象しているだけでなく、三つの集団が所属する共同体の時空間以外の外部があたかも不在であるかのように語られている。

一方、「鷹四」は「蜜三郎」とは別な形で「S兄さん」を意味づけていこうとする。「鷹四」は「朝鮮人部落襲撃」に関して次のように述べている。

これは蜜に指摘されるまでもなく、夢からの記憶だとおれにもわかつているが、おれは海軍飛行予科練習生の冬の制服を着たS兄さんが、谷間の青年たちの集団を指揮しながら、朝鮮人部落の屈強な精鋭たちに闘いをいどんでいる、花ばなしい光景の記憶を

持っていると感じているよ

「鷹四」は、「S兄さん」を「贖罪羊」の役割を主体的に引き受けた「犠牲的ヒーロー」と考え、「S兄さん」に指揮された「無法者グループ」が「朝鮮人部落」を襲撃したという構図のもとに出来事を捉えようとしている。右に引用した「鷹四」の言葉の前には、「蜜三郎」が「S兄さん」は「指導者」になり得るような人間ではなく、谷間の「みんなからたばたばなぐさみものにされるほど」の存在でしかなかったと述べている箇所がある。「鷹四」が自分の「記憶」を「夢からの記憶」だと述べているのは、そうした「蜜三郎」の言葉を意識した上での発言となっているからである。

しかし、「鷹四」は、「蜜三郎」の批判をよそに、「S兄さん」を「犠牲的ヒーロー」として意味づけるために言葉を組織していく。その際に導入されているのが、(i)過去を記録するテキストの読み、(ii)過去を表象するものとしての記憶、という二つの問題系である。

(i)「谷間の盂蘭盆会の風習」である「念仏踊り」に関して、「蜜三郎」は妻の「菜採子」に対して以下のように説明している。

窪地には、(中略) 邪悪なもの^{ないし}、邪悪をなすものが訪れる。しかもそれは谷間の人間にとって、それを拒否し外部へ押し戻すだけでは解決できない性格をもった存在である。なぜなら、もともとそれは谷間の民衆に属するものたちだからである。毎年、盂蘭盆会にそれらは森の高みから敷石道をつたう一列の行列をなし

て谷間に戻り、生きている人々に敬意をこめてむかえられる。僕は、折口信夫の論文によって、森から戻ってくるころのものが、すなわち森と他界から谷間と現世に働きかけて害をなすことのある「御霊」であることを教えられた。

(中略)

僕が見た盂蘭盆会の行列のうち、もっともめざましい変化として記憶に残っているのは、戦争中のある夏突然に、兵隊服を着た「御霊」たちがあらわれたことである。それらは谷間から出征して戦死した者たちの「御霊」であった。(中略) S兄さんの死んだ次の夏の盂蘭盆会には、晝屋が予科練の制服を借りに来たので、僕が母親に内緒で冬服の上衣だけを貸してやった。翌日、森から敷石道を降りて来た一隊には、それを着こんだ「御霊」が参加して熱情的に踊っていた。

(7)

「蜜三郎」の説明は、「念仏踊り」を一種のテキストと捉え、その内容をいくつかの解釈格子を用いて解説しているものと捉えることができる。その解釈格子として用いられているのが、「折口信夫」の論を援用することで導入される「他界」「現世」「御霊」といった民俗学的チームであり、「蜜三郎」自身の記憶である。すなわち、一方で、民俗学的チームを解釈格子とすることで「念仏踊り」を一般的な民俗学的儀礼として解説し、それが共同体に所属していた者を「御霊」化する構造を持っていることが明らかにされている。それと共に、自らの記憶を解釈格子とすることで「念仏踊り」を共同体内部

の儀礼として解説し、自己の記憶を共同体のエボックと重ね合わせることで、「念仏踊り」の可変的側面が共同体のエボックメイキングな出来事を反映している要素として読み解かれている。そうした二様のテキスト解説がここでは行なわれているのである。

「鷹四」は、「蜜三郎」が説明する後者の共同体内部の儀礼としての側面に着目し、「念仏踊り」と自己の「S兄さん」に対する意味づけを結びつけていく。

チビのおれは現実には、盂蘭盆会の念仏踊りで、海軍飛行予科練習生の制服の冬の上衣を着たS兄さんの「御霊」が、青年たちの集団を指揮しながら朝鮮人部落の連中と闘うが、ついに撲り殺されて上衣を剥ぎとられ、真白のシャツとズボンだけにされてうつむきに倒れるのを見たんだ。撲り殺されたS兄さんの腕が、踊っているように、足は跳躍しながら走っている者の足の形だったといっただろう？ それはそのまま、荒あらしい跳躍にみちた念仏踊りの、唐突な停止の瞬間をあらわしている。(中略)それは実際上の朝鮮人部落襲撃の記憶ではなくて、この事実が、谷間の人間の共同の情念のうちに形象化されて再現される、念仏踊りの世界での体験だったというわけさ。(中略)それはむしろおれが、谷間の人間の共同の情念につながっている根を、なお持ちこたえていることを意味するのじゃないか？

(7)

ここには「蜜三郎」が提示していた「朝鮮人部落襲撃」に関する

見解との間に決定的な断絶が刻み込まれている。「蜜三郎」は二回目の「襲撃」を「償いの襲撃」と意味づけ、「S兄さん」の死を「朝鮮人部落」の側に「贈与」することで、「朝鮮人部落」の人々も含めた共同体内部の集団間の対立として出来事を分節化していた。それに對して、ここでの「鷹四」のテクストの解説は、統一的なものとして表象された「共同体」の側に「S兄さん」の死を回収するものとなっている。すなわち、「蜜三郎」が共同体内部の対立として捉えていた状況を、「鷹四」は「谷間の人間の共同の情念」を設定することで、「共同の情念」を保有する共同体の内部／それ以外の外部という二項対立的状況へと変換しているのである。また、引用部の最後の言葉が示しているように、語り手としての「鷹四」自身がそうした共同体の内部の一員として位置づけられることにもなっているのである。

(ii)「僕(蜜三郎・引用者注)と鷹四と妻、それに(星男と桃子の・引用者注)ハイティーン二人組」で「S兄さんの骨をとりて寺に行つた」帰りの車中、「蜜三郎」と「鷹四」は「S兄さん」に関する自らの記憶を語っていくが、「S兄さん」の「死」に関する二人の記憶もことごとく対立する。「鷹四」は、それが「事実と夢とがどこで接続しているのか」わからないという留保をつけながらも、「S兄さんが撲り殺された日の光景」の「克明」な「記憶」としてその死体の様子を語る。それに対して「蜜三郎」は「S兄さん」の死体を見たのは「リヤカーを曳いてS兄さんの死体をとりに行つた僕と、死体を積みこむを手伝つてくれた朝鮮人部落の人たちだけ」であり、「鷹四」の「記憶」が彼「自身の意識する部分よりもっと根本的なところ

ろまで、夢の創作によつて占領されていることを指摘」する。その批判に答える形で、「鷹四」は「S兄さんが殺された日」の情景に関する自分の「記憶」を以下のように語っている。

S兄さんが殺された日の夕暮、暗い土間でおれがアメを食つてじつと立つたままだったと、蜜がいつたろう？(中略)おれはいまその情景の中に生きている子供のおれの、内側と外側とはつきり思い出したよ。(中略)蜜はS兄さんの死体を運んで戻つて来たところだ。座敷では母親が気が狂っている。いつ母親が障子をあけて前庭の小作人たちの幻を叱りつけはじめるかもしれない。(中略)そこでチビのおれは、どんなにすばしく逃げだそうとしても成功しない窮地に追いつめられて、恐しい暴力にとりまかれていた。死体も狂気も、もつとも端的な暴力だ。だから、おれはアメを細心になめることによって、傷口が盛りあがる肉に埋めこまれるような具合に、自分の意識が肉の中にもぐりこんでしまい、外部の暴力的なものにすつかり背を向けてしまえるよう希望していたんだよ。(中略)単純な話だが、おれが暴力的なものについて考えると、自分の先祖たちがかれらをめぐる暴力的なものに對抗してよくも生きのびることができ、おれという子孫に生命をつたえ得たものだと思議に思うよ。かれらは恐しい暴力の時代を生きたんだからね。ここにおれが生きている事実の背後に、おれにつながる人間がいつたいどれだけの量の暴力的なものに對抗しなければならなかったんだろうと考えると気が遠くなるなあ

「鷹四」はこのように述べた直後で、「今日、仮設橋に腹這いになって、今にも潰れてしまうかもしれない子供の軀をすぐ目の前に見つめている間に、暴力についてあれこれ考え、そして土間でアメを食っていた時の状況をすべて思い出した」んだと語っている。

右の引用部では、「鷹四」は、回想という形式をとることで、「語る私」と「語られる私」を二重化し、「語られる私」が過去に気づかなかつたことがらを現在の「語る私」が提示するという形で視点を形成し、「蜜三郎」の表象を再構成するという方法をとっている。ただ、「語られる私」が過去に気づかなかつたことがらは、過去に潜在していたという点では過去の状況に所属するものであるが、「今日」の出来事の中での「暴力」に関する思考によつて初めて顕在化し、過去に潜在していたものとして見出されているという点では現在に所属するものでもある。それゆえ、ここで表象されている過去は、「蜜三郎」の表象を自己の視点から語り直すことで作り出されたものであり、「鷹四」の現在における回想行為と対関係的に構成されたものとなっている。

と同時に、引用部後半の「暴力的なるもの」への「対抗」に関する言葉は、発言を行なっている「鷹四」自身をある意味づけのもとで構成するものになっている。別の箇所では「鷹四」は、「万延元年の一揆」の指導者として聞った「曾祖父さんの弟」や「S兄さん」を自分の家系上の「ヒロイックな光彩」を帯びた「非業の死」を遂げた人々として捉え、自分をその系列に所属する者として位置づけ

ようとしている。先に触れた「S兄さん」への意味づけもそうした「家系」を構成するためのものであるわけだが、ここで「語られる私」が気づかなかつたこととして挙げられている「暴力的なるもの」は、その「家系」へと接続し、「先祖たち」と自己とが共有する要素へと変換されている。ここでの「暴力的なるもの」は、発言を行なっている現在の「鷹四」を過去の死者たちとの連続性において捉えることを可能にするものでもあるわけである。

以上の検討を、「鷹四」の発言が何を語ることで何を行なっているかという点の、行なっていることの側に重点を置いてまとめると以下のようになるだろう。その発言は、「S兄さん」という死者と語り手としての「鷹四」自身を「共同体」の内部へと位置づけ、現在の「鷹四」と過去の死者たちを連続的に位置づける系譜を構成している。ただ、発言によつて浮上したそうした諸要素は、この段階ではまだ、右で見たような「家系」によつて保証されているに過ぎない。しかし、現在の出来事との関連で現出する別の構図の中に位置づけられた時、それらの諸要素は本節で見てきたのとは異質な意味を担うものとなっていく。次節ではそのあり方の検討を通して、テクストにおける現在と過去の関連づけの問題を考察していく。

III

「鷹四」は村の青年達を集めて「フットボールチーム」を作り、彼らと共に、村を経済的に支配している「朝鮮人」の経営する「スーパー・マーケット」を二度にわたって「略奪」する。「鷹四」は「蜜

三郎」との対話の中で、その二度の「略奪」を、「百年前の先祖たちの一揆」の「現実的な再現」であり、「曾祖父さんの弟の精神の運動を……実感」することを可能にする「想像力の暴動」であると意味づけている。

先に触れたように、「鷹四」は自己了解の根拠となる「家系」に所属する者の一人として「曾祖父さんの弟」を捉えており、「フットボールチーム」を作ったのも、「曾祖父さんの弟」がかつて谷間の若者達を組織化して一揆に関与していったのを模倣しようとしているからだとされている。「鷹四」の「略奪」への意味づけはそうした志向の延長上にあり、「万延元年の一揆」「曾祖父さんの弟」等を現在の出来事を意味づけるための歴史的な根拠として提示しているものと考えられることができる。

しかし、そうした「鷹四」の意味づけを脇に置いて考えると、「スパー・マーケットの略奪」の「村の若者達による二度にわたる朝鮮人に対する襲撃」というあり方は、「朝鮮人部落襲撃」の構図に酷似している。それゆえ、「略奪」の意味を見るのであれば、「朝鮮人部落襲撃」を持ち出してくる方が適当であろう。実際、「谷間の人間」は「朝鮮人部落襲撃」を参照することで「略奪」を意味づけている。一回目の「略奪」の後、「蜜三郎」と「ジン」は次のような会話を交わしている。

「この窪地に朝鮮人が来てからというもの、谷間の人間は迷惑をこうむりつづけでしたが！ 戦争が終ると、朝鮮人は、土地も金も谷間から挽ぎとって、良い身分になりましたが！ それを少しだ

けとりかえすのに、なにが同情してかからねばなりませんかの？」
「ジン、もともと朝鮮人は望んで谷間に入ってきたのじゃないよ。かれらは母国から強制連行されて来た奴隷労働者だ。しかも僕の知っている限り、谷間の人間がかれらから積極的に迷惑をかけられたという事実はない。戦争が終わった後の朝鮮人集落の土地の問題にしても、それで谷間の個人が直接損害をこうむったということとはなかっただろう？ なぜ自分の記憶を歪めるんだ？」

「S次さんは朝鮮人に殺されましたが！」とジンは僕に対する警戒心を急速に回復しながら訝かしげにいった。

（10）

「ジン」は、現在の「スパー・マーケットの略奪」が「谷間の人間」にプラスになるものであることを証するための歴史的な根拠として「朝鮮人部落襲撃」を持ち出している。「窪地」に入ってきたから「土地も金も谷間から挽ぎとって、良い身分になった」「朝鮮人」と彼らから「迷惑をこうむりつづけ」てきた被害者としての「谷間の人間」という構図を形成し、その象徴的な出来事として「朝鮮人部落襲撃」における「S次さん」の「死」を提示する。そして、これまでの「朝鮮人」と「谷間の人間」の位置関係を逆転するものとして現在の出来事を把握し、「スパー・マーケット」を「略奪」する現在の「谷間の人間」を過去との関係において統一的・肯定的に了解していこうとしているのである。

ここで注意しなければならないのは、こうした構図や了解を可能にしているのが、「鷹四」が「朝鮮人部落襲撃」を意味づけていく際

に浮上させた諸要素——「犠牲的ヒーロー」としての「S兄さん」、自己と「S兄さん」を連想的に位置づける系譜を構成することで可能となる発話の位置、外部の他者としての「朝鮮人」、共通の歴史を所有する統一的なものとして表象された「共同体」——の結合であるという点である。すなわち、「鷹四」の発話によって浮上した諸要素が現在の出来事との関わりにおいて想像的に構成された構図の中で結びつけられ、「朝鮮人部落襲撃」に対する意味づけという形で「谷間の人間」の歴史意識が顕在化しているのである。

ただ、そうした歴史意識を可能にしている構図は、「蜜三郎」が批判しているように、「朝鮮人」として存在する他者をネガティブに表象することによって「谷間の人間」である自己をポジティブに表象するという「谷間の人間」の一方的な価値づけと、「朝鮮人」が「母国から強制連行されて来た奴隷労働者」であり、「谷間の人間」がかれらから積極的に迷惑をかけられた「ことではない」という「事実」を消去することによってかろうじて成立しているにすぎない。この構図の問題性が、今度は「鷹四」の発話の位置を問うような形で浮上してくる。現在の出来事が進行していく中で、「スーパー・マーケットの天皇と朝鮮服を着こんだその妻の「御霊」が登場するものとして「念仏踊り」が「復興」される。その「念仏踊り」に対して「鷹四」は次のように言っている。

おれたちの暴力的な権威が、スーパー・マーケットの天皇の暴力団に劣るのじゃないかと、不安に感じていた谷間と「在」の連中がみな、あの『御霊』をさんざん嘲弄しているうちに、スーパー・

マーケットの天皇を軽蔑する情念の力をかちえたのさ！（中略）連中は自分たちの先細りの生活の悲惨さを見通してきた。そしてこれまで森の中で自分たちがもつとも惨めな種族だと感じてすっかり怯みこんでいた。ところが戦前・戦中の朝鮮人への優越感の甘い記憶を思い出したんだ。かれらは自分たちよりもなお惨めな朝鮮人という賤民がいたという再発見に酔って、自分たちを強者のように感じはじめたのさ。そういう蠅みたいなかれらの性格を集団に組織するだけで、おれはスーパー・マーケットの天皇に対抗し続けることができるだろう！

（11）

この「鷹四」の言葉は、右で見たような構図の「谷間の人間」による共有が「スーパー・マーケットの襲撃」を成立させる条件となっていることを示している。「鷹四」自身は、そうした構図を共有する「谷間」と「在」の連中を「卑小な蠅ども」と否定的に対象化しているが、「鷹四」自身もその外に在るわけではない。

「鷹四」の「想像力の暴動」は「念仏踊り」による「情念」の湧出をその頂点として「沈滞」していく。そんな中、「鷹四」が村の娘を「強姦しようとして抵抗され、その娘を撲殺してしまう」という出来事が起こる。「蜜三郎」は「鷹四」が語るその出来事の様子を「鷹四」によって形成された「フィクションの犯罪」であると述べ、本当は単なる事故であったに過ぎないのではないかと指摘する。そうした「鷹四」と「蜜三郎」を中心にした対話の中で、「鷹四」は次のように述べている。

（谷間の・引用者注）連中はそろそろ暴動も、それに加担した自分たち自身にも厭気がさしているんだ、そこで暴動のすべての悪をおれに封じこめてそれからおれを叩き殺せば、すべては償われると考えるやつもいるだろう。そして実際、それはそのとおりなんだ。S兄さんの時と同様に、おれが贖罪羊になればかなり多くのことが単純化されるよ

（12）

「鷹四」は「谷間と『在』の連中」に共有された構図が「蠅みたいなかれらの性格」によって構成された利己的で恣意的なものであることを自覚していた。⁸しかし、ここでの「鷹四」の言葉は、谷間の「連中」の「蠅みたいなかれらの性格」の反動を出来事の中に対象化し、そこから見えてくる劇化された自己像を「S兄さん」になぞらえて自分の行く末を予言的に語るものとなっている。それは、結局、現在の自己を「谷間の人間」が共有する構図の一要素と認めるものとなっているのである。

と同時に、ここでは「鷹四」が過去の出来事の表象において設定していた共同体の内外の分割が、現在の出来事の中で問い返されていると捉えることもできる。「朝鮮人部落襲撃」の表象では、「鷹四」は「共同体」の内部へと位置づけられていたわけだが、ここでは、「共同体」の内部に自らの発話の位置を維持できなくなっている。外部としての「日本」を切断して共同体の時空間を構成する「鷹四」的な方法と、それに基づいて形成された「共同体」内部における発話の位置が、ここで初めて問題化されているのである。

さて、そのように考えてみると、今度は「鷹四」的なそれとさほど変わらない時空間の設定を行っていた「蜜三郎」の側も問題となってくるわけだが、現在の出来事における「蜜三郎」の発話はある種の揺れを見せている。

先に見た「ジン」との対話において、「朝鮮人」の「母国」という形で外部の時空間を導入しているという点では、「蜜三郎」は「鷹四」的な共同体の分割の仕方から距離をとっているように見える。

しかし、その一方で、「朝鮮人部落襲撃」を次のように捉え返してもいる。「今」に「復興」された「念仏踊り」の中に「朝鮮人の純白な衣装を着かざって扮している」「御霊」がいるのを見て、「蜜三郎」は、「第一回目の襲撃」で「谷間の青年たち」は「殺人の他に、S兄さんの死のみによつてはすでに償いえぬほどの恐ろしいことをしてしまっていた」のではないか、そして、「それを知っていたからこそ第二回目の襲撃にあたって贖罪羊になる決意をかためたS兄さんがお絶望的な憂鬱と共に……じっと考えこんでいたのではなかったか？」と推測している。

この「蜜三郎」の見解は、「S兄さん」の「死」の「贈与」という基本的な枠組みを維持しながら、加害者としての谷間の人間という視点に基づいて、「ジン」や「鷹四」が提示していた「朝鮮人部落襲撃」の表象の内容と表象への価値づけを交換しようとするものとなっている。ただ、この見解が依拠している時空間は、基本的には、外部が不在であるかのような共同体内部というII節の始めて見たものと同じであると言える。その意味では、ここでの時空間の設定は、「ジン」との対話におけるそれとは異質なものとなっている。

「蜜三郎」の揺れはこうした時空間の設定の仕方に関わるものだけではない。右の「朝鮮人部落襲撃」の捉え返しが、「今」に「復興」された「念仏踊り」から喚起されたものであることに注意するならば、ここでの「蜜三郎」の発話は、現在の状況との関わりにおいて見えてくる過去の出来事の再解釈となっていることがわかるだろう。つまり、ここでの「蜜三郎」の発話には、発話を行なう現在の状況と発話の内容との間にある種の関係が生じており、1節で見たような内容と行為のレベルの分離を要求する立場とは相容れないものとなっているのである。

こうした点は「蜜三郎」の「曾祖父の弟」の捉え返しにおいても表われている。先に触れたように、「鷹四」は「曾祖父の弟」を「百姓たちの指導者」「ヒロイックな抵抗者」として捉えていた。それに対して、「蜜三郎」は、「住職」から「曾祖父の弟」の「手紙」を譲り受け、その解説を通して「絶望的に壊滅した一揆の指導者でありながら、ひとり脱出して平穏な晩年をむかえ」た者として「曾祖父の弟」を捉え、「鷹四」の「曾祖父の弟」像を批判する。しかし、「鷹四」の死後、「倉屋敷」の中から「地下倉」が発見され、「蜜三郎」はそこに「曾祖父の弟」が暮らしていたと考え、自身の「曾祖父の弟」像を変化させていく。

まず、「蜜三郎」の「ひとり脱出して平穏な晩年をむかえ」た者という「曾祖父の弟」像が「手紙」のどのような解説によって生み出されたものであるかを見てみよう。

「蜜三郎」は、「文久三年」から「明治二十七年」までの「日付け」をもつ「曾祖父の弟の五種類」にのぼる「手紙」を年代順に整理し、そ

の記述をもとにして彼の経験をたどっていく。「文久三年」の「手紙」からは「曾祖父の弟」が「ジョン・万次郎の捕鯨船に乗り組んで……品川を出航」したこと、また、「慶応三年」の「手紙」からは彼が「横浜」で「アメリカへ渡る希望」をもっていたこと、などを読み取っている。あるいは、「明治二十二年」の「谷間に住む曾祖父が、憲法発布の報を受けてそれを喜ぶ手紙を都市の弟に送ったのに対する、冷静な批判をこめた返事」における「発布されようとする憲法の内容が分量の少ない恩賜の民権をあたえるにすぎないだろうことを予想し、それを憂えて、進取的民権を獲得するための集団があらわれて活動することを切望」する記述からは、「曾祖父の弟」が「民権の側の人々に加担する「志」」を持っていたはずであり、「曾祖父の弟」が維新政府の高官になったという伝説は、まったく真実を反映していないだろう」という推測を行なっている。

ここでの「蜜三郎」は、「手紙」の「日付け」を軸として、その記述と、「鷹四」的な共同体の内外の分割の仕方では切り落とされてしまう「日本」の時空間とを関連づけていくことで、「曾祖父の弟」の経験を跡づけていく方法をとっている。

さて、「地下倉」発見後の「蜜三郎」の「曾祖父の弟」像は次のように変化している。

曾祖父の弟は万延元年の一揆後、仲間たちを背後に見棄てて森を抜け新世界に出発したのではなかったのだという発見は早くも動かしがたい。かれは仲間たちが斬首^{ざんしゅ}される悲惨を阻止することはできなかったが、かれ自身もみずからを罰したのだ。かれは潰滅^{かいめつ}

の日から地下倉に閉じこもり（中略）生涯にわたって転向はせず、一揆の指導者としての一貫性を持続したのだ。

（「13」）

こうした「曾祖父の弟」像を提示した上で、「蜜三郎」は「地下倉」という「新しい証拠事実」と「住職」から渡された「大窪村農民始末記」という小冊子の記述を関連づけ、「明治四年の一揆」に指導者として登場した男は「曾祖父の弟」なのではないかという推測を行なっている。「十年間をこえる自己批判の日々をつうじてかちえたすべてを投入してかれは、血なまぐさく成果の疑わしかった最初の一揆とはうつつかわって、暴動の参加者と傍観者に唯一の死傷者も出すことなく、しかも攻撃の目標たる大参事を効果的に自殺へと追いつめ、処罰される暴動参加者は無いという成功裡に第二の一揆を推進したのだ」。

「蜜三郎」によって再解釈された「曾祖父の弟」像は、「鷹四」が提示していた「指導者」「抵抗者」という表象と呼応するものと言えるだろう。と同時に、「蜜三郎」自身が「鷹四」と「曾祖父の弟」とを重ね合わせることで自己のそれまでの「鷹四」に対する姿勢を自己批判してもいる。「新しい証拠事実が出て来た以上、僕は曾祖父さんの弟についても鷹四についても、自分の固定観念を崩して再審しなければならない。」「僕は鷹四が子供の時分から僕に対抗意識を燃やしてきたのと同じく、自分もまた鷹四のめざすイメージとしての曾祖父さんの弟と、鷹四自身に敵意をいだいており、かれらの行動とは逆の穏やかな生き方に意味をもたせようと努めてきた」。本節の

始めでも言及したように、こうした「鷹四」と「曾祖父の弟」との重ね合わせは、「鷹四」が「スーパード・マーケットの略奪」を意味づける際に提示していたものである。その点から言えば、「鷹四」の現在の出来事の中での発話と、「新しい証拠事実」がもたらす現在の発話の状況とが、「蜜三郎」の「曾祖父の弟」の捉え返しに関与していると考えられる。ここでは、自らの発話の前に発せられた他者の発話と、現在における発話の状況と、発話の内容との間に深い結びつきを見ることができるのである。

また、時空間の捉え方という点から見ると、「蜜三郎」の「大窪村農民始末記」の読み取りは、先に見た「手紙」の読み取りで設定されていた「日本」の時空間を外部とし、それに対する内部として「倉屋敷」に「閉じこもり」続けた「曾祖父の弟」の時空間を捉えていくという枠組みに基づいて行なわれている。ここでも「鷹四」的な時空間の設定から一定の距離がとられているのである。

結

I～III節での考察を踏まえながら、序節に対する応答という形で本論の結論をまとめていこう。

I 節の最後で指摘したように、「発話」における「解釈の葛藤」は、発話の内容のレベルと行為のレベルの関係と共同体の内外の分割の仕方という、二つの問題系をめぐって展開されている。物語構造との関わりから見た場合、「鷹四」の言説は、発話の二つのレベルを重ね合わせることで、現在と過去を関連づけていく機能と、外部

としての「日本」の時空間を切断した上で共同体の内外の分割を行なうことによって特異な内部の時空間を形成する機能を担っている。また、Ⅲ節での検討を踏まえるならば、後者の共同体の内外の分割の仕方の限界を明らかにする役割も同時に担っていると考えられる。

こうした「鷹四」の言説の機能を念頭に置くと、「郷土史家」や「住職」の言説は、発話の二つのレベルを切り離し、「日本」を外部とする共同体の時空間を構成することで、出来事の表象を一般的な形で整理していく機能を担っているとわかる。その点から考えると、言説の性質と機能という側面から見ると、先行研究が前提としていた「蜜三郎」／「鷹四」という対比よりも、特異的な時空間を構成し、出来事への特異的な意味づけを行なう「鷹四」の言説／一般的な時空間を構成し、出来事への一般的な意味づけを行なう「郷土史家」や「住職」の言説という対比を設定する方が適切であろう。

では、そうした中で「蜜三郎」の言説はどのような機能を担っているのだろうか。Ⅲ節の最後で言及したように、「蜜三郎」は、発話の二つのレベルの関係という点においても、時空間の設定の仕方という点においても、揺れを見せている。この揺れの側からテクストを捉えてみるならば、「蜜三郎」の言説が場面場面での内容や性質を変容させていくことで、自己と他者の言説の間に、そしてまた、他者の言説相互の間に、インターテクスチュアルな葛藤や呼応を生み出していることが見えてくる。すなわち、「蜜三郎」の言説は、他者の言説に様々な形で関わっていくことで、複数の表象・解釈がそれぞれの異質性を保持したままで併存することを可能にする機能を

担っているのである。その点から考えると、先行研究が言及していた彼の「傍観者」性は、他者の言説を超越的な位置から階層化した一義化したりせずに、複数の言説が異質なままで併存することを可能にするために導入された、戦略的な人物像として捉えるべきであろう。

また、そうした複数の言説が、「発話」と「共同体」という二つの問題系を介在させながら、過去をどのように表象するかという点をめぐって「解釈の葛藤」を繰り広げていることに着目するならば、舞台としての「谷間の村」が、複数の過去の表象・解釈＝複数の「歴史」を実験する場として選択されていることが理解できる。発話のレベルの差異と時空間の設定の仕方の差異を起点として、過去の表象・解釈に関わる「解釈の葛藤」が多様な形で生起することを可能にする場として「谷間の村」はあるのである。

こうした視点から『万延元年のフットボール』以後の「谷間の村」を舞台にしたテクストを捉え返してみるならば、そこで問題となっているのが、歴史表象・歴史叙述の方法であることが見えてくる。本論で言及した「解釈の葛藤」を引き起こす要因を様々な形に変化させていきながら、「谷間の村」を舞台として複数の「歴史」の語り方を試みていくこと。「谷間の村」の「神話と歴史」を扱った『同時代ゲーム』⁽¹⁰⁾『M/Tと森のフシギの物語』や、『メタヒストリー』としての小説⁽¹¹⁾としてある『懐かしい年への手紙』などで扱われているのはそうした問題なのであり、その意味で、大江健三郎の問題意識は『歴史』を語る方法をめぐって展開されていると言えるのである。本論の「序」で述べた「谷間の村」の描き方の通時的な変遷はこうし

た視点から検討していくことができるだろう。そうした点に関しては別の機会に改めて論じてみたい。

注

- (1) 横井司「谷間の村」(柘植光彦編「大江健三郎のキーワード」『國文学』一九九〇年七月号)。
- (2) こうした分析は多くの論で見られるが、それらは『万延元年のフットボール』が発表された直後に出た書評や研究で提示された図式を踏襲しているものと考えることができる。そうした図式を提示している代表的なものとしては、「ラディカルな行動家」「鷹四」と「非行動の認識者」「蜜三郎」とする松原新一「地獄と救済の呼応」(『大江健三郎論』講談社、一九六七年十月)、「行動家鷹四」と「観照家」「蜜三郎」とする大岡信「文学は救済でありうるか」(初出は『中央公論』一九七二年九月、後に『群像日本の作家23 大江健三郎』小学館、一九九二年八月に所収)、「暴力的青年群」を代表する「鷹四」と「国内亡命者の青年群」を代表する「蜜三郎」とする伊豆利彦「『万延元年のフットボール』」(『國文学』一九七一年一月)などがある。
- (3) 井口時男・室井光広・松原新一「座談会 大江全作品ガイド」(『群像特別編集 大江健三郎』一九九五年四月)における井口時男の発言に拠る。また、過去の出来事に関する「解釈の葛藤」を「記憶」という側面から分析しているものとして、成田龍一「方法としての記憶——一九六五年前後の大江健三郎」(初出は『文学』一九九五年第六卷第二号、後に『日本文学研究論文集 成45 大江健三郎』若草書房、一九九八年三月に所収)があり、本論の分析もこの論に多くを負っている。
- (4) 「万延元年の一揆」に関する「解釈の葛藤」のあり方については、桑原丈和「万延元年のフットボール」と一揆の物語——「夢のような昔の話」が持つ意味」(『大江健三郎論』三一書房、一九九七年四月)を参照。
- (5) 「万延元年のフットボール」の本文の引用は全て講談社文芸文庫版「講談社、一九八八年四月」による。
- (6) 「発話」の相互参照的なあり方については、M・パフチン「ドストエフスキーの言葉」(『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、一九九五年三月)を参照。
- (7) 「記憶」における「語る私」と「語られる私」の分節化に関しては小森陽一「出来事としての読むこと」(東京大学出版会、一九九六年三月)参照。また、「記憶」における「語られる私」が過去に気づかなかったことがら」の持つ問題性に関しては、ヨネヤマ・リサ「記憶の弁証法——広島」(『思想』一九九六年第八号)などを参照。
- (8) 「鷹四」が「谷間の人間」を否定的に捉え、彼の「想像力の暴動」が最終的に単なる「暴動」以上の展開を持ち得なかった点に関して、北村耕は「鷹四の行動原理が、一揆をたたかった「民衆の思想」とまったく関係ないところ」にあり、「現実変革をめざす民衆の思想を現代につなげ」という「大江の意図」に

「鷹四」はふさわしくない人物であると批判している（「見失われた民衆の思想——大江健三郎『万延元年のフットボール』について」『赤旗』一九六七年十一月二四・二五日）。北村の論では「民衆の思想」の内容が明確化されていないので彼の批判をそのまま受け入れることはできないが、そこで挙げられている点を、過去を表象する方法に関わる問題として本論の議論に即した形で置き換えることが可能である。I節・II節での分析からわかるように、「鷹四」「蜜三郎」「住職」など、どの人物の発言を見ても、「一揆」における「民衆」（農民）・「朝鮮人部落襲撃」における「朝鮮人」の立場を代弁する言葉を見出すことができない。この点をより一般化して考えると、過去の出来事の対象において言葉を奪われた立場の人間に対して大江がどのようなスタンスを取っているか、あるいはそうした人間の言葉を掘り起こそうとするモチーフを大江がどのくらい持っているのかという問題へと拡張することが可能である。この問題は、マサオ・ミヨシが『新しい人よ眼ざめよ』との関わりで指摘している、「言葉のない人間のための言葉の探索というテーマ」と関係するものであろう（初出は「歴史と思考の文脈と作家——大江健三郎の話相手——」『世界』一九九四年十二月、後に前掲『日本文学研究論文集成45 大江健三郎』に所収）。こうした問題に関しても別の機会に論じてみたい。

（9）
亀井秀雄は、こうした複数の〈歴史〉の語り方の問題を、『同時代ゲーム』や『M/Tと森のフシギの物語』との関わりで「我がたりと家がたり、村がたり、国がたり」という語りの四つの

パターンの問題として指摘している（イルメラ・日地谷IIキルシュネライト・亀井秀雄・鈴木登美・藤井貞和・宗像和重『座談会』「我がたり」の言説について）『文学』一九九八年第九巻第二号）。ここでの議論はその指摘を念頭に置いている。また、同書の中でイルメラ・日地谷IIキルシュネライトは、亀井の指摘を踏まえて、『万延元年のフットボール』がそうした四つの語りが重ねられている作品として捉えられるのではないかという問題提起をしており、本論の議論はそれを受けた形でなされてもいる。

（10）
小森陽一「メタヒストリーとしての小説……大江健三郎『懐かしい年への手紙』（原題「解説『懐かしい年への手紙』——メタヒストリーとしての小説」『懐かしい年への手紙』講談社学芸文庫、一九九二年一〇月、後に前掲『日本文学研究論文集成45 大江健三郎』に所収）。

（よしおか りょう・北大大学院博士課程）